



最北端の地の碑



あのマチ
このムラ
・地域おこし活躍中

No.42

稚内市の事例

― 最北端に新たな歴史を刻み続ける農業者達 ―

稚内を有する宗谷の概況

北海道の最北端に位置する宗谷（稚内市（沼川）、猿払村、浜頓別町、中頓別町、枝幸町、歌登町、豊富町の一市六町村）は、島を含め、東西一五〇km、南北約一〇〇kmにわたっており、全道面積の約五%を占め、東京都のほぼ二倍、長崎県に匹敵する広大な地域である。

人口は、約七万八千人（稚内

市は四万二千人）で、全道総人口の約一・四%を占めています。が、市部、郡部ともに近年、減少傾向が続ぎ、ピーク時の六割と過疎化・高齢化が進んでいる。なお、核家族化のせいか逆に世帯数は増加している。

人口密度は一平方km当り約一九人で、全道平均の約六八人にくらべかなり低く、全道一四支庁のうち一〇位となっている。

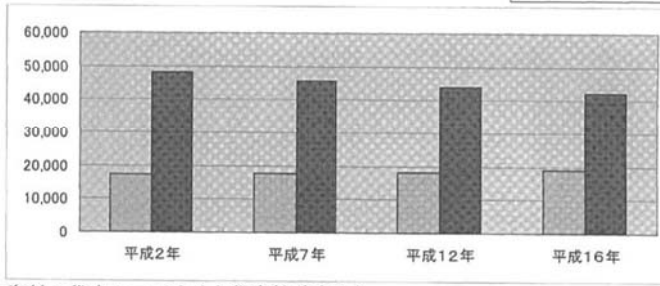
人口を産業別で見ると、農業従事者は全体の五%で、漁業を

含めた第一次産業の割合は年々低下している。建設業や製造業といった第二次産業は全体の二五%を占めており、小売業やサービス業の第三次産業の割合は年々増加している。

土壌は、河川沿いの低地には、泥炭土が広く分布している。台地には、酸性褐色森林土および擬似グライ土、沖積地には灰色および褐色低地土、擬似グライ土や泥炭土は重粘土といわれ草地の開発・維持管理が難しい土

稚内における人口数・世帯数推移

左：世帯数（戸）
右：人口（人）



資料：稚内ウェブサイト稚内統計書より

壤となっている。

気候は、真夏でも二五℃を超える日は少なく、紺碧の海に囲まれ、冷涼な地域となっている。

地形は、約二万年前の最終氷河期の間形成された氷河由来の特徴的なものである。氷河周辺での凍結融解の繰り返しによって丘陵となったもので、谷が樹枝状に伸び高低差のある地帯となっている。

ロシアと海をへだて国境を接する街 稚内

稚内空港のタラップを降りると、そこには海と、花・風・匂いなど自然がいっぱいの真の北国の風景が広がる。そこに位置する稚内は、まさに最北端の街で漁業、酪農、観光の街である。稚内は、南下するサハリン海流、日本海を北上する対馬海流

（宗谷海流）、オホーツク海に注ぐ東樺太海流の合流地点にあり、周りにはいま北海道には失くさりつつある山菜（ささのこ、ぜんまい、たらんぼの芽等）、きのこ（牛の糞の下にマイタケ）やハマナス、ナナカマド等の花が自然のままそこにある。

稚内の歴史は古く、一六八五年（貞享二年）に松前藩の直領場所（現稚内市宗谷）として宗谷場所（アイヌとの交易の場）が設けられて始まった。年一回の松前藩船と米、酒、斧などアイヌ民族との交易の場や漁場として重要な位置を占めてきたが、明治に入って、宗谷支庁が設置され、その後、現稚内市の東方にあった宗谷村に戸長役場が置かれたのが稚内の開基とされる。稚内の名の由来は、アイヌ語の「ヤム・ワッカ・ナイ」で、冷たい水の出る沢が語源とされる。



稚内公園から見下ろした稚内市街

稚内のシンボルの花



ナナカマド



ハマナス
昭和 53年 7月制定

稚内の西には、海の中にぽつんと聳え立つ利尻富士で有名な利尻島、レブンアツモリソウを始めとする天然の高山植物がある礼文島があるが、そこは漁業中心となっており農業らしきものはない。

海岸の向こうには最北端から四三 kmしかなく元日本領土であったサハリンが、天気がよければかすかに島影をみるこゝとができる。現在、稚内ーコルサコフ間で定期航路が開通している。このサハリンには、州

全体で五八万人おり、州都はユジノサハリンスク市となっている。最近では、日本の中古車を求め、いまにも壊れそうなロシア船が稚内に入港するようになった。カニと昆布を持つてきては、中古車や電気製品等をこれそとばかり船積みし帰国していく。稚内には、稚内駅と南稚内駅があり、以前繁華街は稚内駅前周辺だったが、南稚内方面に移りつつある。稚

内の景観を変えてきているのは、外部からの大資本をもつ系列化企業の進出であり、徐々に札幌にあるチェーン大型店が稚内から豊富に続く国道四〇号線沿いに多くなってきた。

しかしながら経済圏が札幌より比較的遠いところにあること及び埋立を言む港湾整備事業があったせいから地元信金や地元建設、漁業関係企業が依然として圧倒的に多いのも特徴である。ちなみに、平成十四年度の漁業と農業産出額の比較では、農業が伸びているがまだ漁業の生産額の方が多い。

稚内農業の歴史と概要

〔農業は自給的な畑作から〕

稚内の農業は、当初自給的な畑作がほとんどで、原始林を焼き払いその焼け跡を鋤で筋を切

り秋までにとれる食料作物を作付けし炭を副業とした事から始まる。開拓当時は、水稻を試作、大方の畑作物はとれたし、川には副食となる魚がいて食べ物だけはなんとかなり不足しなかったらしい。その後馬鈴薯や雑穀が栽培されるようになった。

過去、原始林の焼き払いと風の厳しさのため稚内では人命を襲う何回かの大火に見舞われている。今ではその大火があったとされる跡地には高い木はない、作家林芙美子が昭和九年に「樺太への旅」で触れている。それが今でも稚内の特徴となっている。

〔既に明治にあった牧場とバターの出荷〕

明治中頃に牧場が稚内（ウエンナイ）に開設（肉牛）したことに伴い農場経営が形成され、馬、乳牛（シヨートホーン種、

エアシャー種)が飼養されるようになった。その後稚内で市乳の販売が開始され、稚内(増幌)に企業家の大農場建設が盛んとなる。明治後半になると増幌の農場が東京へ紅葉バターとして出荷を開始(昭和二十年頃まで)している。

【農業形態は「畑作」】

やがて「酪農」へ

大正に入ると、稚内に澱粉工場が操業され、第一次世界大戦の澱粉景気を受け、各地に工場ができるようになった。

大正中頃に旧天北線(平成元年に廃止)が敷かれ、その後、現宗谷線が全面開通となった。その頃から稚内周辺が開拓され人口も増加していった。

同じ頃、「勇知いも」(稚内)や「沼川いも」が道外に出荷された。

この時点で農業形態の主流は

馬鈴薯主流の混同経営となつて
いる。(連作障害が起きる昭和
三〇年代前半まで続いた。)

しかしながら、寒冷な気候と
特殊土壌の影響は大きく度重なる
冷害凶作に見舞われる度、畑
作農業は不安定となり経営形態
の中心は畑作から酪農へと移行
することになる。甜菜は昭和四
十四年に、麦類は昭和四十六年
には耕作されなくなり、その姿
を消した。

【酪農の開拓とその歩み】

当初の酪農は、畑作の全盛期
には、牛舎施設は乏しく野外搾
乳が行われ、粗飼料は雑草に等
しいものであった。その後、昭
和初期に雪印乳業頓別工場が建
設されたことにより、沼川にも
集乳工場が建設され、当時は馬
そりによる生乳出荷であった。

戦後に入ると、農地解放ととも
に戦後開拓入植が各地で起こ

り、現在はこの戦後開拓入植者
の方が多くなつてゐる。

昭和二十三年の農業協同組合
法の公布により、各地に民主的
農民組織の農協、開拓農協が結
成・設立され、宗谷村農業会が
宗谷農協として、稚内町農業会
が沼川農協として、そして勇知
農協が生まれた。その後、宗谷
と勇知が合併し稚内農協が誕生
している。今は稚内には二つの
農協が存在する。都市部に位置
する稚内農協と純農村地域にあ
る沼川農協である。合併の動き
はあるようだが進展はしていな
い。

昭和三十年代は、稚内空港建
設工事が着手され、かつて遠く
て敷時間を要した最北端の地が
手軽にいける地域となった。ま
た東・西天北集約酪農振興地域
指定により酪農専業地帯へと動
きた。また馬にかわる農用地
機械開発が猿払村浅茅野台地よ

り始まつてゐる。

昭和四十年代は、酪農近代化
計画・国営大規模草地造成工事
の開始、浄水場整備等により酪
農の大型化が促進される。その
後、計数管理の合理化にコンピ
ュータの導入、大型バルククー
ラーの導入、草地型酪農の開発
が行われた。

昭和五十年代になると、生乳
の計画生産が始まり、酪農の負
債対策として「酪農負債整理資
金」の融通が始まった。この資
金の導入がなかったら、現在よ
りもっと酪農者があつたものと
判断され、大家畜資金とともに
農業者にとつて救済資金となつ
たことに間違いはない。

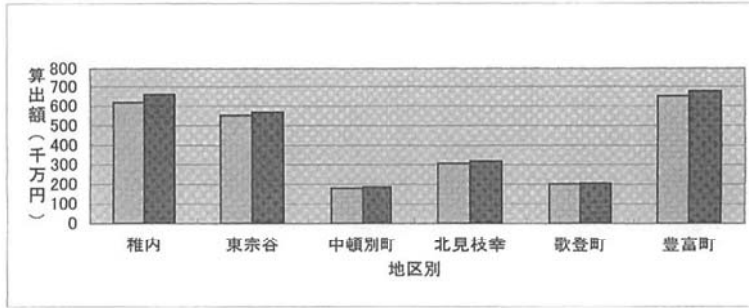
【農業近代化に向け新たな

挑戦のはじまり】

平成になると、地域過疎化の
進展と車社会を迎え天北線が廃
止される。

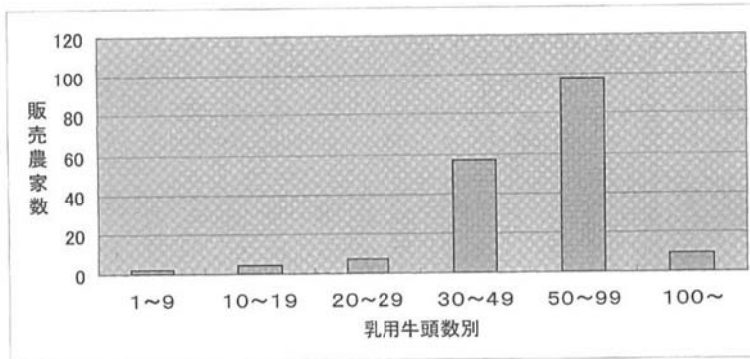
宗谷管内農業産出額

左：平成 14 年
右：平成 15 年



資料：宗谷支庁データより

稚内における規模別乳用牛飼育農家



資料：2000年センサス（農業編）*2歳以上乳用牛飼育頭数規模別

牛肉の自由化がはじまり、米
国、豪からの輸入が増加し、肉
牛生産が厳しくなった。

平成十一年には、「食料・農
業・農村基本法」、「家畜排泄物
の管理の適正化等の法律」が制
定され、新たに糞尿汚水対策が
必要となる。

その後、BSEが発生、その
十一月には二例目が宗谷で発生
し、マスコミで騒がれ、その農
家は離農となった。

そのことは、牛管理のあり方
が問われることになり、全頭検
査、トレーサビリティやHAC
CP等の導入等消費者を意識し
た経営を実施しなければならな
い新たな局面を迎えている。

稚内における現在の農業 の概要

平成十五年の宗谷支庁データ
によると、稚内の農業は草地形

酪農・肉牛飼養がほとんどである。以下、順次その概況をみることにする。

総土地面積は、七万六、〇八〇畝（宗谷管内四〇万五、〇七一畝（全道の五％）の一九％）。

そのうち耕地面積は一万四、七〇〇畝で、うち牧草畑が（一万四、六〇〇畝・九九％）である。

農業産出額は、六五億九千万円（宗谷管内二六一億九千万円（全道の二五％）の二四％）

のうち耕種は七千万円しかなく、肉用牛六億一千万円、乳用牛五億一千万円（うち生乳四六億九千万円）となっている。宗谷

支庁データによると、稚内は、豊富町の次に農業生産額が多い地域となっている。

生産農業所得は、二二億七千万円（宗谷管内九一億九千万円（全道の二一％）の二五％）前

年に比べ生乳生産量が増加したことにより大幅増となった。

農作物作付面積・収穫量は、

牧草地が一万四、五〇〇畝で管内の五万四、二〇〇畝、二七％を占め、一〇ヶ当り収量は一九九〇kgで管内平均三、〇三〇kgよりやや低めとなっている。

乳用牛飼養戸数は、管内で豊富について多く、一七〇戸（管内七三〇戸（全道九、二〇〇戸）の二四％）飼養頭数は一万六、三〇〇頭いる。飼養規模別で見ると、五〇～九九頭に集中しているが、一戸当りの飼養規模は年々拡大している状況にある。

肉用牛飼養戸数は一〇戸で、肉用牛は三、二二〇（肉専一、一一〇、乳用種二、一一〇）頭いる。

生乳生産量は、六万六、九七九トで管内二八万六、九六九トの二三％となっている。

乳牛飼養農家一戸当りの生産量は、二九四トで管内平均三九三トとほぼ同じとなっている。

宗谷における酪農業生産状況

次に、稚内を含む宗谷全体ではどのような状況か見てみることにする。

経産牛一頭当り乳量（平成十五年度）は、全道八、六七八kgに比べ八、三〇六kgとやや低めである。良質な牧草の粗飼料生産に努めているが、牧草は他地域から購入せざるを得ず、やや不足がみで地域的条件のハンデがあるといえよう。

濃厚飼料給与量は、年々増加傾向にあり、乳量アップはそれに依存している傾向にある。脂肪率、無脂固形分比率も向上しており、生産努力が窺がえる。

また、乳用牛の飼養動向を見てもみると、宗谷の農業生産額に占める業種の割合は、酪農業で全体の約九四％を占めている。

まさに宗谷は酪農一色の地帯である。

乳牛飼養頭数は、昭和四十～五十年代に急速に増加し、平成五年にピークを向かえたが、近年は減少傾向にあり、平成十五年で約六万三、〇〇〇頭となっている。飼養戸数が減少していることから、個々の酪農家の大規模化が進んでいるといえる。

一戸当りの飼養頭数は、全道平均とくらべやや少ないが年々増加傾向にある。よって酪農家戸数の減少や乳製品の輸入拡大等により厳しい環境下にあるとい

えど、個々の大規模化傾向は今後もかわらないであろう。今後の労働不足やゆとりのある経営を考慮すると、自ずと機械化はやむを得なく、その方向で経営規模が変遷していくだろうと予測される。

今後、その多頭数経営を支えるといわれているフリースト

宗谷管内の検定成績

区分	経産牛1頭当り乳量		濃厚飼料	濃厚飼料生	粗飼料生	脂肪率	無脂固形分
	全道	宗谷	給与量	産期待乳量	産乳量		
平成11年	8,223	8,000	2,721	5,986	2,014	3.90	8.78
平成12年	8,336	7,935	2,762	6,076	1,859	3.95	8.69
平成13年	8,384	7,842	2,772	6,098	1,744	3.96	8.77
平成14年	8,519	8,070	2,830	6,226	1,844	4.05	8.76
平成15年	8,678	8,306	2,877	6,320	1,977	4.09	8.79

資料：宗谷支庁〔宗谷の農業2004〕より

乳牛舎の宗谷の保有状況（十六年度）は、五七戸で管内で八％、全道対比四・三％となっている。ミルクパラーでは五七戸で管内で八％、全道に対する割合は四・七％となっている。全道的に比べてまだまだ低い普及率となっているが、農協正組合員一戸当りの貯金額は、四千万円台で安定しており、平成八年度以降は借入額を上回っているということだから、近代化していくための施設投資の資金的能力は十分蓄積されているといえよう。

最北端に位置する宗谷岬肉牛牧場

稚内のもうひとつの顔である最北端で頑張っている宗谷岬牧場を紹介しよう。

最北端の碑がある宗谷岬には、その岬の丘陵地に位置して、丘陵地一、六〇〇畝、牛舎三棟、採草地、牧草地一、一七〇畝の広さを有し、年間通じ肉牛にあつた比較的冷涼な気候のもと、現在約三、〇〇〇頭を飼養し、年間出荷頭数は約一、五〇〇頭にもほのぼの肉牛牧場がある。

昭和五十八年に稚内市をはじめ管内町村、各農協、チクレンが出資して社団法人宗谷畜産開発公社を設立し、総事業費八九億円をもって牧場建設が着工、八年かけて竣工した、牛が斑点でしか見えないほど大規模な牧場である。

当初は、アンガス、ヘレフォードの外国種肉牛を二〇〇頭生産しスタートし、外国種繁殖から肥育までの一貫経営で、飼養頭数は六〇〇頭規模であった。当初年間出荷数は、二五〇から三〇〇頭で、稚内市内加盟店

に「稚内牛」として卸し、残りにはホクレンへ販売していた。これらは肉質が多少固めであり好評とはいえなかったようである。

そこで、氏本牧場長やスタッフの肉質の改善に努め、従前の繁殖牛、ホルスタイン種に黒毛和種をかける交雑種F1を生産し、「宗谷黒牛」という名でブランド化したことや本州大消費地へ向けた販売を開始したことにより経営は拡大し、好転してきている。

氏本牧場長はこう述べている

「国内農業においては、産地から消費者などステイクホルダー（利害関係者）に対する生産情報発信の重要性が増しているが、その情報発信はトレーサビリティなど一定のクオリティを伴ってはじめて信頼性が担保される。



宗谷峠肉牛牧場 氏本長一牧場長

良質な産地生産情報は、社会的責任（CSR）であり、生産物のブランド化にも大きく貢献する。このことは、WTO体制下での輸入畜産物に対する国産の非価格競争力強化の意味を持ち、産地の地元自治体にとっては有効な地域活性化戦略に運動する。その地域における産官学連携による発信情報の質的、量的な向上が望まれるが、その基礎となるのはあくまで生産者自身の経

営理念である。」と。

すなわち、産地生産における情報等の品質の重要性は勿論、さらに重要なのは経営者自身の社会的責任の自覚と経営理念にあるのだと強調する。

自然を尊重し安全・安心に配慮した経営、裏表なく地域とコミュニケーションをとり共生していくこと。及び「元気である」という発信」も大事だと述べている。それは「どんな状況においても経営者自身が元気をもたなくては、これから経営を引き継ぐ若者達が自ずとそこから離れていくことになるからである」という。

また、今後の経営計画等を聞いたところ「今年の秋には、オーガニックを基本とした「ラム肉生産」を開始する予定である。また、クリーンエネルギーとして宗谷丘陵の西端に五万七、〇〇〇kw規模の風車が五七基立ち

並ぶことになる。一大風力発電施設が建設され、十八年二月には稼動する。」とのこと。そのことは、自然との共生や経営基盤の構築につながるもので、生産性向上の一助となることに間違いない。

最近、国内での「宗谷黒牛」の知名度が高まっており、需要が生産を上回っている状況で、大阪や東京圏への供給が優先しており、道内には十分供給できない状況にある。

稚内市の街並みでは「宗谷黒牛」の看板等が目立つようになった。そのことは、安全で健康的な牛肉としての評価を受けている証拠であり、精肉類はもちろん「北の黒牛ハンバーグ」「ピフジャーキー」「フランクソーセージ」の商品は品質もよいのでぜひ食べていただきたい。お勧めします！

稚内市民とふれあいを大切にした「夕市の会」

稚内農協のAコープ店舗（生鮮を農協が、洋服をラルズと業務提携し、かつ労金も入居しているユニークな店舗でもある）の駐車場で行われる「夕市の会」がある。農協、改良普及センターの支援を受け、女性で高齢者を主とした、一五名で構成する夕市の会である。

午後三時の開店とともに多くの客が訪れる。稚内でとれたての新鮮な有機野菜（いも、人参、大根、山菜、キノコ類等）や加工品、漬物ドライフラワー等をそこで販売し、三〇分もしないうちに売り切れる。

四月から十一月まで毎週水曜日に開催している。売上はその期間で約五百万円もある。夕市はすでに二年もつづき、固定



夕市の会が行われる稚内農協のAコープ駐車場前

客も付き、街の人々には好評を博している。

平成十五年度の北海道貢献産業賞に輝いた。街の人とのふれあいを大事にこれからも生きがいを求め続けていくそうである。

農漁村の交流を行い五〇年の歴史をもつ——JA沼川女性部——

畑作では十分な収穫も得られなく経営も不安定だった沼川という地域で、昭和二十九年に宗谷管内としては第一号として誕生した。

いくどの苦難の時代を乗り越え、いまや酪農地帯へと変遷したが、その経営をささえながら五〇年の歩みを続け、宗谷支庁やぬまかわ農協等の支援のもと、「沼川みのり公園」を舞台に活動している。

九支部があり全体で四〇名を

超えるJA沼川女性部がある。五〇年を記念して「かがやき」という本も発行している。

その活動は、多数の稚内市民が参加するという酪農祭りに出品する作品作り（芋団子、山菜御飯、フライドチキンほか）、酪農・趣味・育児などの情報交換、地域を活性化させる等の宗谷農村女性フォーラムへの運営参加、ピーズ・チーズ等作り、海と山の食材を持ち寄る農漁村交流会等積極的に自分達の独自のアイデアを考え、年々、その活動の場を積極的に広げている。

その公園施設を利用して、ハンバーグやアイスクリーム加工、他地域との交流等を行い、新しいものをたえず取入れるバイタリティがあり、かつ輝きがある女性の集まりだ。

ただ、離農による仲間との別れがもつとも寂しいという。そういうことがないよう最北端で



女性部の活動の舞台となる沼川みのり公園施設

力強く明るくがんばっている女性達を応援したい。

まとめ

稚内農業は、幾多の農産物に挑戦し、いずれも低温気候と低生産性の土地条件のためうまくいかなかったが、先人達の積み重ねる努力のおかげで、今では主要な酪農地帯といわれるようになった。かつては稲作、畑作に挑戦し、負債等によりやむなく離農に追い込まれた人々がいたであろう。

しかしながら、稚内という北の大地に、今でもなお生き残りをかけ、少しでも次の世代に残そうと課題にとりくんでいる生産者達がいる。

起伏のある草地の整備、良質飼料の確保、生産基盤となる牛舎等環境施設の改善、飼養管理・経営技術の改善、新規就農者の

受入れ、農地の利用集積、農村景観の整備、農業用産業廃棄物の適正処理等の課題・問題に取り組んでいる。

なんととっても、これらのことは農業者一人の力ではどうすることもできない。それは地域に同じく苦労する仲間がいる。それを支援する組織がある。だからこそ宮農集落は継続できるのであろう。少子化、高齢化で人口は減少しているが、いつまでも発展しつつけてほしい地域である。

稚内は観光と漁業の街というイメージが強いが、そればかりではなく、内陸部に入ると牧草地がひろがり、放牧風景などところをなごませてくれる農業生産地域となっている。

レポーター

(社)北海道地域農業研究所

特別研究員 中山忠彦